

浦賀文化

咸臨丸

江戸幕府の蒸気軍艦「咸臨丸」は、一八五七年オランダで建造された。一八六〇年一月、横浜でブルック大尉たちを乗せた後、浦賀で最終積み込みをし、荒れる冬の太平洋へ出航した。

幕末に日本人が初めて自力で太平洋を横断した船は咸臨丸。この船が太平洋を横断したことは正しいとしても、「初めて」とか「自力で」といったところに疑問があります。

また、咸臨丸は、なぜ太平洋を渡ってアメリカに行ったのか？

ということについても、この際、明確にしておきたいと思えます。

アメリカへ行った理由は、アメリカとの友好親善を図るための書類（親書）を持って行ったことです。正式な使節は、アメリカ海軍のポーハタン号です。

咸臨丸の役割は、ポーハタン号に万が一のことが起こって沈没した時のことを想定していたようです。したがって、日本国籍をもつ咸臨丸にも同じ書類を積んでいたといえます。

まず、日本人が船に乗って太平洋を初めて横断したことについては、第三十一号『三浦按針』に書いたように、田中勝介とされています。自力で、という点については、

日本人以外にアメリカ人船員が十一人乗り組んでいましたので、これも疑わしいところです。

勝海舟は艦長だったのでしようか。実質的には艦長役を務めていたが、正式には教授方頭取という肩書きしか持っていないませんでした。

さらに、福沢諭吉が浦賀の女郎屋で失敬してきた「ウガイ茶碗」はどうでしょうか。これは正しいようです。その理由は、『福翁自伝』に明確に描かれているからです。

浦賀に上陸して酒を飲まうではないかと云出した者がある。何れも同説で、夫れから陸に上がって茶屋見たやうな處に行き、さんざん酒を飲んで、サア船に歸ると云ふ時に、誠に手癖の悪い話で、其茶屋の廊下の棚の上に嗽茶碗が一つあつた、是れは船の中で役に立ちさうな物だと思つて、一寸と私がいそがれを盗んで来た。其時は冬の事で、サア出帆した所が大嵐、毎日々々の大嵐、なかなか茶碗に

飯を盛つて本式に喫べるなんと云ふことは容易な事ではない。所が私の盗んだ嗽茶碗が役に立て、其中一杯飯を入れて、其上に汗でも何でも皆掛けて、立て食ふ。誠に世話のない話で、大層便利を得て、垂米利加まで行て、歸りの航海中も毎日用ひて、到頭日本まで持て帰て、久しく私の家にゴロチャラして居た。程経て聞けば其浦賀で上陸して飲食ひした處は遊女屋だと云ふ。夫れは其當時私は知らなかつたが、さうして見ると彼の大きな茶碗は女郎の嗽茶碗であつたらう。思へば穢ないやうだが、航海中は誠に調法、唯一の寶物であつたのが可笑しい。『福翁自伝』

こう考えてくると、今の私たちが持っている咸臨丸に関する知識は、はなはだ心もとないものと言えるのかもしれない。それにしても、咸臨丸の乗組員が日本人だけで九十六人もいたことには驚きます。

明治時代に日本の近代化に貢献したことで知られる福沢諭吉は、木村撰津守に再三の願いをし、従者として乗船したそうです。また、通訳として乗組んだ中浜（ジョン）・万次郎は、既にアメリカ仕込みの英語力があり

ましたので、彼の存在は日米友好にどれほど役に立ったか、計り知れません。

最後に、「咸臨」とは、「君臣互いに親しみ厚く、情を持って互いに協力し合う」といった意味があり、『易経』の最後に繰り返して、述べられています。

今年も浦賀の春を告げる「咸臨丸フェスティバル」が、にぎやかに開催されます。奇跡的にも言える太平洋航海を無事に終えて帰国するまでの約三カ月を記念して、毎年、浦賀でお祭りが行われている意味を、もっとと深く考えたいものです。

(芳賀久雄)



日米修好通商百年記念切手(1960年発行)

★参考文献

- ・ 福澤諭吉全集 慶應義塾
- ・ 福翁自伝 岩波文庫
- ・ 船の科学館資料ガイド7 咸臨丸 (財) 日本海事科学振興財団



歴史 語りい座・浦賀 三十七

郷土史家

山本 詔一



『近世浦賀崎人伝』

— 崎人伝の誕生 —

文政十一年（一八二八年）八月、浦賀の干鯛問屋の主人・樋口有柳（吉左衛門）がまとめ、書き記した『近世浦賀崎人伝』が出来上がった。

この本に登場する人たちは、江戸時代後期に浦賀で、それも東浦賀で活躍した村役人、問屋の主人、僧侶、医師、船乗り、職人など二十二人に、編著者の樋口有柳の父親をいれて合計二十三人が物故順に並べられている。

なぜ『崎人伝』を作ろうと思ったのであろうか。その答えは樋口が自ら著わした序文の中にある。そこには「浦賀湊は全国から船が入り、大變にぎやかな町である。しかし、人としての営みは、ごく短いものである。」と記し、「歳月は多くの尊い人を奪ってしまうので、せめて日ごろから集い、活躍していた人たちを一枚の紙に綴って、残そうではないかと話をしていた。しかし、その話をしていた仲間の帯雨と土口も黄泉の国に旅だってしまったので、残った自分がまとめ役することになった」と、記している。

当時の浦賀の人びとは、多くの著名人と交友関係があったが、その中から、江戸時代後期の漢詩の世界の

第一人者であった大窪詩仏が「序」を寄せている。このことは、大窪詩仏と交友関係を持つような文化人のいたことをあらわしており、江戸時代後期の浦賀を見るうえで重要なことである。

さらに『崎人伝』の序は無尽老人（藤沢宿の俳人石年こと阿部元道）で、石年は相州の文人たち幅広い交流があり、彼が序を記しているということは、この本の注目度が相州一円から東海道筋まで及んでいたことを想像させる。

『崎人伝』に唯一あるさし絵は、著名な画家・谷文晁の子の文二が描いてくれた。ここだけ見ても、江戸の出版物に見劣りのしないこの本は、木版四十丁の版本として出版されたものである。

また、後序は浦賀とつながりの深い紀州の学者であり、詩人の霞峰（垣内定こと菊池海荘）が記している。垣内はこのなかで「山川の靈気が逸材を生む」といい、浦賀を取り巻く環境が多くの逸材を輩出する原動力になっていると述べている。

— 二人の仲間 —

『崎人伝』の二十三人は物故順に並べられている。しかし、最初の二人はこの本を企画した樋口有柳の二人の仲間、石井八右衛門（帯雨）と

石井三郎兵衛（土口）である。帯雨と土口はただ仲間というだけでなく、東浦賀村の名主や年寄役を代々歴任している名門であり、この企画をしていた時期も帯雨が名主で、土口が年寄役を任せられていた。浦賀の名主は大変格式があり、浦賀奉行が認可した者でなければやれなかった。ということとは、この二人の家は奉行所のお墨付の家であった。

帯雨は服部南郭の門人に漢詩を習い、また俳諧を好んだ。お酒を飲んでいるときでも上品で風雅のある詩を詠んでいるが、それは決して堅物の窮屈なものではなく、狂歌も詠む粋な人であった。帯雨は四十三才で没している。

土口もまた、幼少のころから謡曲を好み、鼓を習った。書は松平定信にも招かれたこともある書家の陸龍涯に就いて本格的に勉強をしていた。しかしながら、わずか三十九才という若さで没している。

この二人の若きリーダーは、三浦半島で一番経済力のある村を治めるだけでなく、文化人としても一流であり「これぞ浦賀の顔」という二人であった。それだけにあまりにも早い別れは、樋口有柳だけでなく、浦賀全体としても残念であったに違いない。

笑話一題

私の息子は高校でクイズ研究部に所属しています。テレビのクイズ番組でやっているようなことを部活としてやっているわけです。先日「これ分かる？」といわれたクイズの問題が、全くわからず悔しい思いをしました。高校の漢文の授業で習うそうです。皆さんも解いてみてください！

唐の詩人賈島が科挙の試験に行く途中、自作の詩の中の文を「扉をおす」にするか「扉をたたく」にするか迷っているうちに、韓愈（長安の知事）の馬にぶつかってしまった。という話に由来する故事成語はなんでしょう

☆ヒント☆「おす」と「たたく」を組み合わせた漢字二文字。文章を何度も練り直すという意味の言葉です。

答えはよく知られた単語ですよ。解らなかつたら……分館の職員におたずねください！



浦賀コミュニティセンター分館 講座開催のお知らせ



観音崎砲台を中心に戦争遺跡から見た浦賀の近代歴史を学び、旧陸海軍施設跡を巡ります。

① 5月17日(土) 座学(浦賀コミュニティセンター分館)

② 5月24日(土) 初夏の観音崎と砲台めぐり

③ 5月31日(土) 戦争遺跡めぐり

(①9:30～11:30 ②9:30～12:00 ③9:30～13:00)

定員：①抽選35名、②③抽選20名

締切：4月21日(月) 必着

お好きな講座を選んで受講できます。詳細は、広報よこすか、浦賀TODAY 4月号をご覧ください。